

サービ斯拉ーニングを振り返って

社会福祉学部社会福祉学科 2年 青山 彩香

活動先：社会福祉法人 むそう

所属ゼミ：村上 徹也 先生

私はサービ斯拉ーニングで、夏休み前後の期間に渡り、実際に地域に出て、座学ではなく自分自身の目や頭を使って、地域が抱える問題の発見、またそれに向けた解決方法の模索等を目標の中心に据え活動を行った。

活動先は、半田市を拠点とする「社会福祉法人 むそう」であった。障害者の方の生活支援から社会的自立へ向けての就労支援など幅広い視野をもった法人であるが、この機会を持つ以前には、障害者の方と接したり、日常的サポートを行うなどといった経験は非常に乏しかったため、この機会に活動を通して学びたいと考えた。活動の目標は、①利用者とコミュニケーションを円滑にとり、活動先の活動理念を理解する、②活動を通して、社会福祉法人の地域コミュニティでの接点や地域社会での存在意義を確認する、以上二点を同じ活動をするメンバー内で挙げた。活動期間は6日間で、主な内容は、半田市内で開催されるお祭りの企画・実行・サポートを行うというものであった。初日から三日目までは、お祭りの意義の整理、お祭りのボランティア募集とお祭りの宣伝を兼ねたビラ作りと配布、具体的なお祭りの内容と出店を企画・考案をし、四日目から最終日では、お祭りの準備や地区の方との打ち合わせ、利用者の方の就労現場の拝見、お祭りの実行を行った。

まず、サービ斯拉ーニングを通しての自分の成長と気づきについて述べたいと思う。期間を通して行ったことは全て、自分自身の自主性・積極性を高めることを基本に、第三者にわかりやすく伝達するための工夫をするという点が共通していた。企画でも、ビラづくりでも、相手は地域住民をはじめ見ず知らずの人たちなので、自分が自主性・積極性をもたなければ、一緒により良いものを作ることは難しい。また、わかりやすく伝えるには、私の理解が十分に及んでいなくてはいけない。お祭りを何故行うのか。そこで求められていることは何か。その求められていることに対して私は具体的にどう行動する必要があるのかを明白にした上で、活動を行うことが重要であった。そのため良い成果を出すため試行錯誤を繰り返した。積極性・自主性を確立するために注いだ時間や努力は計り知れなかったように感じた。よってこの問題提起の答えとしたいと考える。

実際に自分たちが赴く活動先によって割り振られたお祭りは板山地区祭、向山地区祭、紺屋街道祭の三つであったが、私はそのうちの向山地区祭を担当した。このお祭りは、8月13日から14日の2日間にわたり行われ、むそうの職員の方のサポートを受けながら手伝いをさせていただいた。開催場所が住宅が多く立ち並ぶところにある神社で、夜が深くなるにつれ、たくさんのお客さんが見えた。子どもたちから大人の方まで幅広い年代の人たちが、屋台や役員の皆様の企画した出し物などでとても楽しまれており、会場は非常に

明るい笑顔と歓喜で溢れていた。お祭りは大盛況であった。私は出店では、焼き鳥のサポートをしており、お客さんが長い列をなして焼き鳥の順番を待たれていたが、その際、お客さんの輝いた目や、今か今かと楽しみにしてくれる姿は、提供する側としては感極まるものがあった。また、食べて「美味しかった！」「ありがとう！」などとお声を頂いたときは、こんなに感動することが今までにあっただろうかと考えてしまうほどに嬉しく感じた。

ここで、活動を通して見えてきた地域活動や社会活動について述べる。このお祭りの最中、障害を持っていると考えられる方が来場された場面があったのだが、この方に対し地域住民の人々は、何ら分け隔てなく温厚に接し、また思いやりがあったため、こちらが見ていて心温まる光景だった。この点から考えられることは、地区全体で、障害者に対する受け入れ、またサポートできる支援体制、環境づくりがなされているということだ。これは他の市町村でも大切にすべきことだ。障害者の人も、一人の住民として、住みやすい、心に余裕も持つことができる地域に生きたいと考えるのは必然であろう。が、地域住民の障害者に対する考えが非常に希薄で、冷ややかなものである場合が多いことから、生活する地域で生きづらさを覚えてしまう。ゆえに、地域課題として、地域住民の障害者に対する理解と、地域共同体の輪の寛容化を図り、障害者の住みやすい環境づくりの具体的・積極的構築、これらが求められると考える。また社会活動としては、やはり幼児期からの福祉教育が必要だ。地域福祉の一層の発展のためには、幼い頃からの福祉の学びを充実させることで、ボランティア実践など地域福祉活動ができる環境づくりができる。より多く福祉を理解した社会人を育てるプロセスが重要だと考えられる。そうすれば自ずと福祉を理解した人が生まれ、社会に根付く、障害者に対する多様な隔たりを除去することが可能となるはずだ。

サービスマーケティングを通して学び気づくことは沢山あったが、とりわけ、自分自身の障害者に対する眼差しは、偏見そのものであったということに気づき、反省している。この期間中、就労支援の現場に行き、利用者の方と接する機会があった。その際、私の周りに障害者が多くおり怖いというような心情を抱いた。福祉を学ぶ者として如何なものかと後悔したが、障害者の方から見ても私の考えていたこと・気持ちはわかっていたようで、そのために利用者の方を怒らせてしまった時があった。この時初めて、自分の考えの愚かさ気づき、ちゃんと障害者の人の気持ちを理解したいと真剣に感じた。これをきっかけに、ある職員の人に、この仕事についてどう考えているのか質問を投げかけた。その人は「すごく楽しいよ！みんな明るくて面白くて元気でこっちもすごく元気もらえるんだよね！この仕事やりがいがあってほんとに毎日充実してるよ！」と答えた。その答えとその人は、私にはとても眩しく思えたが、同時に私もしっかり相手を理解して、差別することなく一人ひとりにきちんと目を向けて接することをこれからしようと考えた。将来、精神障害を抱えた方をはじめとした人たちに、音楽が持つ力でゆっくり時間をかけて改善を図ろうとする音楽療法を正しい姿勢で行うためにも今回学んだことを大切にしながら日々の学業に専念し、福祉を理解した社会人になるため一所懸命に励もうと考える次第である。